

巻頭言

ティーチングからラーニングそしてグループ・ラーニングへ

本学も教育改革の議論を始めてからかれこれ5年になる。ようやく出口が見えてきた。この教育改革は3つの獲得目標を掲げて始めた。その1つは、建学の精神、基本理念、使命や目的といった社会との契約事項を確実に実践すること、2つは、7学部24学科からなる総合大学としての大学教育の創造的な展開であり、3つは質量ともに安定した入学生を確保し、未来志向の人材育成である。これまでの大学改革は組織体制や教育課程といったシステム・形態論に重きをおいて進められてきた。ここでの改革案は教員個人がそれぞれのキャリアから導きだした教育論や研究論さらには世界観や人生観を基にその最大公約数をもって改革案とし、改革案作りが改革とされ、この案を実践する手立てが抜け落ちていた。だから、大学改革は労多くして実少なしの疲労感だけが実感される状況を生んだ。

改革はあくまでも手段であり、そのことによって社会と時代が求める大学を再構築することに繋がなければならない。大学が社会から専権事項として負託されている職責は学位の授与権である。つまり、あくまでも社会が求める人材の育成である。だから大学教育は20—30年先の社会がどんな人材を求めているかを科学的に判断し先見性のある教育を時代に先行して行うことになる。

20世紀は無限を前提にした量的拡大を指導理念とした時代であり、これを受けて大学教育は規格化された知識や技術を画一的に記憶させ応用させる教育、つまり知識伝達型の教育を進めてきた。ここでは学生はまさしく知識や技術の吸収者であり、教員はその供給者であった。だから、ティーチング（知識伝達）主流の教育が大学教育とされてきた。新興の情報・IT教育にしても、知識伝達型教育の範囲で進められてきた。

これからは、有限を前提とした持続性の追及が指導理念となろう。ここでは人間が本来的に得意としている知的に満足できる社会を作り出すことになろう。世に言うところの知識基盤社会の創出であり、能力が財産になり、知識が資本となる時代である。だから、この21世紀に責任を持つ若者の大学教育も当然見直さなければならない。一人一人が主人公として知的な活動を進める能力を磨き上げる教育を組み立てなければならない。これが学習力の育成教育である。

私は、7年前から知識創造型教育の推進を学生や教員に訴え続けている。学生は教員と一緒に新しい知識や技術を作り出す現場に立ち会うことで、課題発見やその解決に必要な知識や技術を実感するのである。この実感こそがラーニングの動機になり、学習主体としての能力を身につけることに繋がる。近頃、大学教育におけるラーニング（自主的な学習）の重要性が叫ばれるようになったのは、このような状況によるのだろう。

学習の主体はあくまでも学生個人であるが、この学習能力を全面的に開花させるためには、学習者間での相互交流が大事である。知的な興味や能力には大きな個人差があり、知識の世界全体を知るには限界がある。この個人的な限界を補い合うためにはグループとしてのラーニング（集団学習、コミュニティとしての学習）が大きな役割を果たすことになる。このグループ・ラーニングはいわゆる超個体としてのラーニングであり、個人力ではとても及ばない学習を可能にすることになる。個人の完全性を追求することは不可能である。個人力の補足としてのみでなく個人力を超越した学習力をもものにするところに、グループ・ラーニングのもう一つの意義がある。学習主体としての学生コミュニティーがどれほど実質化できるかを、今回の教育改革でも実現したいと願っている。

今日の大学教育は、海図なき航海であり、海図作りが大きな仕事となっている。そして、作ったとたんにはすぐ次のものを作り直さなければならない、といった激動の中に大学はあるように思われる。だから、大学教育については、大学そもそも論と共に現場密着のケース・スタディーも大事な研究であるし、これら両方の研究成果が個性的な新大学を作り出す知を与えることになろう。

このような意味で、ここに、中部大学教育研究第9号を発刊いたしました。特別寄稿をお寄せ下さいました、寺崎昌男先生と田中毎実先生にお礼申し上げます。また、編集にあたられました坪井和男中部大学教育研究センター長はじめ関係者の皆さんに対して感謝いたします。

2009年12月

学 長 山 下 興 亜